

こんなにも至近距離で切れている静雄を見るのは初体験だ。遠目で臨也と争う彼を見たことはあったが、間近で見ると当たり前だが、ものすごく怖い。迫力がありすぎる。

この場合、逃げるのが自分にとっては良いのだろうか、しかし今の自分は一応、『折原臨也の恋人(ごっここの相手)』なので、やはり逃げるべきではないのだろう。

「相変わらずシズちゃんは暇そうで良いよねえ。人生退屈そうだよねえ本当。俺みたいに恋人とか作ったら？ まあシズちゃんみたいな人外じゃ無理だろうけどさあ！」

「……マトモな恋をしたことない臨也さんには言われたくないと思いますよ、それ」

恋人なのだから臨也の意見に頷いた方が良く、と頭では理解していたが、つい、そう突っ込んでしまう。そうしてその後で静雄に向かって、こへこと頭を下げつつ口を開く。

「あの、すみません。本当にすみません。後で臨也さんにはよく言って聞かせるので今日は見逃してください」

「あ？」

静雄は、といえば、おそらく最初はそもそも帝人の存在自体に気づいていなかったのだろう。自分を手で制した後、臨也はごく自然な動作で帝人をの身を自分の背で隠していた。その動きは実にスムーズで、女性ならば『庇われている』と感動したかもしれない。帝人の場合は感動よりも前に『慣れてるなあ、いつものことなんだろうなあ』と良くない意味で感心した。

それはともかく、そんなわけで静雄の視界に帝人は入っていなかっただろう。それなのに静雄にしてみれば突然現れた帝人にそう言われて、きょとんとした顔を見せるのも当然と言えた。

「あの、僕、竜ヶ峰帝人と言います。その、以前セルティさんのマンションでお会いしたことがあるんですけど」

「……いや、そりゃ覚えてるけどよ」

てっきり顔も名前も覚えてないだろう、と思っていたが、どうやらそうでもなかったらしい。

あの平和島静雄が自分の存在を覚えてくれていた、という事実にくっそり感動しつつぼかんとしたままの静雄に向かい、さらに言葉を紡いだ。

「僕、臨也さんとおつきあいすることになったばかりなんです。なのでさすがに今、臨也さんを殺されるのはちよつと困るんです。見逃してください」

何しろ大事な金蔓だ。そして今、この二人で戦争を始めたなら確実に帝人は巻き込まれる。

二人ほど頑丈ではないし運動神経も良くないので、巻き込まれたらほぼ間違いなく、怪我するだろう。下手すると命も危ない。

それは是非、絶対、ものすごく、何が何でも遠慮したい。回避したい。

「……お前……、やめとけ、人生台無しにする気か」

絶句した後、静雄はどうにか、といった様子で口を開いた。